

KOHEI TAKAHASHI solo exhibition

高橋 耕平 個展

HARADA-san

京都出身・在住の美術作家・高橋耕平(たかはし・こうへい/ 京都・1977~)は、京都精華大学で版画と写真を学び、大学院卒業後は、アーティストとして個人活動のみならずアートユニットでの発表やコラボレーションワークなどにも精力的に取り組むなど、幅広い活動を続けています。

2006年よりとりわけ映像メディアを用いた作品制作・発表に取り組む高橋は、あらかじめ設定したルールや条件を基に「反復」や「複製」などのキーワードに焦点をあて、同じ動作やイメージの反復によってそこに「比較やズレ」といった思考を介入させ、「固有(唯一)」であることの定義や条件を問いつける作品を発表しています。その多くはある意味で演劇的・パフォーマンス的なベクトルを持ちながら、「記録・演出・アクシデント・編集」といった要素が高橋によって意図的に混在させられ、映像が特定の物語を形づくることを回避し、そこに「反復・複製とズレ」という事象のみを際立たせたものと言えます。また、これにより鑑賞者に自らの見ている対象(映像)についての定義や構造を検証・再構築する必要を迫るものであるといえます。

本展「HARADA-san」は、京都のギャラリー界隈では有名なアートウォッチャー「はらださん」への数ヶ月に渡る撮影・取材をもとにしたドキュメント形式による1時間の映像作品を中心に構成されています。会場には「はらださん」からの聞き取りを基にした巨大な年表(テキスト)の裏に、「はらださん」の日本のアート・社会に対する語りからはじまり、日常の様子、ギャンブル、市内のギャラリー巡り、愛用の自転車の手入れ、思い出の場所への訪問などの場面に加え、撮影者(高橋)とのやりとりなどを交えて記録・編集された映像がプロジェクションされています。そこにはコトバ、イントネーション、身振り手振り、笑い声、テンション、佇まい、暮らしぶり、立ち回り先、自意識、無意識などが撮影された映像、あるいは映り込んだ撮影場所の背景にある日常といった「はらださん」にまつわる無秩序な情報に加え、撮影者・編集者である高橋の意志や意図までもが内包されています。

「人は様々な側面を見せず。理性的であること、動物的存在であること。社会の秩序やルール、その破壊。自制出来ない感情の表出、非倫理的な行動など。私はこれらを映像装置によって捉え、編集し、空間に配置することで、世界の中心であろうとする人間の有り様を見つめたいと考えています」と言う高橋の新作は、「はらださん」という固有の世界(物語)の生々しい断片を寄せ集め、他者のありのままを「ドキュメント」という形式を借りてなぞるかのようです。そして、それは一見するとこれまでのような演劇的な「定義や構造」を映像内につくり出すことから離れたようにも見えます。しかし、鑑賞者にとって年表上のテキストやスクリーン上の映像が、主観や客観、真実や物語の無い交ぜとなった、いずれも「検証不能」な断片の集積であり、そこにあるものが「ありのままの混沌」であると気付いた時、ここではやはり「自らの見ている対象が何であるか」という自問自答が始まることとなります。

本展はテキストと映像によって「はらださん」という対象を展示するとともに、「鑑賞者」を強引にその一部に組み込んで始めて構築される演劇的な構造をメタとして展示しているといえるのではないのでしょうか。そして、本作はこれまで高橋がモニター内(映像内)につくりだしてきた演劇的な構造を、鑑賞者を含めた外側(現実)に持ち出してなお、そこに検証や再構築といった批評的な状態をつくりだせるかという試みであり、展示空間はその舞台装置として在るともいえるのではないのでしょうか。

statement

私は映像を扱います。映像は私にとって重要な経験装置です。撮影者としても鑑賞者としても私にとって重要な記録装置です。私は映像に記録されるエッセンスを拾い、織り成し、ひとつの詩や曲を作るように、世界が凝縮された時間を生成したいと考えています。

私の興味を大きく捉えると人間の存在、その中でもとりわけ行為と結果に興味があるとと言えます。映像を使った初期の作品では、意図的に長時間停止するよう人に指示を与え、その場面を記録し、人間が静止出来ない様を捉えた作品を発表しました。また近年は、作家自身が被写体となり、弟や友人とともに互いの行為を反復し、その過程と結果を展示する作品を発表しています。更に最近作では、被写体となるモノが、匿名的な出来事、被写体よりも、記名的で特徴的な個人やローカルの出来事に関心向き、それらを題材、被写体として活動に移行しつつあります。

人は常により良く生きようと勤めます。しかし、思い通りにいくことは多くありません。その中で人は様々な側面を見せず。理性的であること、動物的存在であること。社会の秩序、ルール、その破壊。自制出来ない感情の表出、非倫理的な行動、などなど。私はこれらを映像装置によって捉え、編集、空間に配置することで、世界の中心であろうとする人間の有り様を見つめたいと考えています。

高橋 耕平

高橋 耕平 / TAKAHASHI, Kohei

<http://takahashi-kohei.jp/>

1977年 京都府生まれ、2002年 京都精華大学大学院芸術研究科修士

おもな個展

- 2008 「TAKE-A little action and small accident」京都造形芸術大学 Gallery RAKU
- 2006 「emotional pictures」Jshin-bi、京都
- 2004 「高橋耕平展」OGallery eyes、大阪
- 2003 「PICK」信濃橋画廊、大阪
- 2001 「高橋耕平展」信濃橋画廊、大阪

おもなグループ展

- 2013 「新収蔵品紹介1 | 信濃橋コレクション」兵庫県立美術館
「3331 ART COLLECTOR FAIR」3331 Arts Chiyoda 1F メインギャラリー、東京
- 2012 「かげうつし - 写映 | 遷移 | 伝染」京都市立芸術大学ギャラリー@kcu1,2
「加納俊輔・高橋耕平展『パズルと反芻』」island MEDIUM, NADiff window gallery, 実家JIKKA、東京都内3 会場で開催
『消息-Pre-sage』鈴木崇+高橋耕平」HI-NESTBLDG.、京都
- 2011 「加納俊輔・高橋耕平展『パズルと反芻』」Social Kitchenほか京都市内3会場で開催
- 2010 「global connections and implications」Louisiana State University、アメリカ
- 2009 「feat. huntorama salon show」muzz program space、京都

展示作品

HARADA-san

2013 HD video (58:52) 鉄、木製パネル、ターポリンにインクジェットプリント、他

協力:原田真司 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA, アートゾーン神楽岡, ART SPACE NUJI, GALLERY SUZUKI, ギャラリーモーニング, MORI YU GALLERY, Gallery Ort Project, 小山登美夫ギャラリー 京都, タカ・イシイ ギャラリー 京都, 同時代ギャラリー, gallery PARC, 常林寺, 藤田美智, 芦田尚美, 宮永亮, 他、(敬称略、順不同) *京都芸術センター 制作支援事業

※尚、階段部分モニターでは高橋耕平の過去作品5点を参考展示しております。

高橋耕平は京都芸術センター主催「作家ドラフト2014」への入選により、2014年2月8日~3月9日まで「作家ドラフト2014『史と詩と私と』展」(京都芸術センター南ギャラリー)を開催予定です。